

令和2年度

50才の妹は、四ツ谷警察署の霊安室にいました。「強いものを発しているから長くいないでください」と警察の人に言われ、何が？どうして？と、唯々呆然としていました。

事件から約3ヶ月後に、ようやく妹を介抱してくれた人から話を聞くことができました。

妹は、日比谷線八丁堀駅のホームで激しく痙攣を起こして倒れていたそうです。周囲の人はてんかんかと思って、服を緩めたり、温めたりして、「誰か、助けてあげて」、「救急車を呼んで下さーい!」、「もう呼んでいるよ!」などと悲鳴と怒号の騒ぎになっていたそうです。医療関係者だという人が人工呼吸をしたのですが、妹は、ものすごく唾液を出して、グタツとなってしまったということでした。

穏やかだった妹はキリスト教徒でしたから、死刑ということは望んでいなかったかもしれませんが、妹が「私は何もできないからね」と嘆いているかと思うと、いまでも存在するオウム信者たちを、私は絶対に許せない気持ちです。

(令和2年10月28日記)